

神社の杜(四十四)

御岳ピジターセンター 片柳 茂生

大工さんと左官屋さんは従兄弟？

御嶽神社に江戸時代から伝わる太々神楽。なんと言ってもその花形は神楽を舞う舞人です。この神楽を習得するために年に一回、三日間の講習が行われ、若手神職は舞の通りから、手、足、頭の所作まで徹底的に先輩達から教わりまします。集中して教えてもらえるのはこの期間だけ、後は舞台に出されてしまい、本番で舞いながら習得するという習わしです。そんな舞を習う傍らではもう一つの伝授も行われています。それは神楽に合わせる楽のお稽古です。こちらの裏方を楽屋と呼んでいるのですが、この楽屋も伝承するためまた必死なのです。何故なら譜面は無く、曲の全ては口伝によって習わなければならぬからです。

楽は、笛と大胴(太鼓) それと台拍子(大きな鼓)の三種の組み合わせです。それぞれのパートは江戸時代の昔より先輩から後輩によって受け継がれてきました。神楽は現在十四座継承されており、曲の名称は必ずしもその神楽と同じではありません。サガリハとかオオミヤ、ナカトミノナガウタ

などと格好良い名称で呼ばれている曲もありますが、中にはオヒヤラヒヤなんて言うんだか訳の分らない曲もあるのです。笛の口伝は、トヒヤロヒヤロトヒヤリトロとか、ピフーヒヤロピフーヒヤロ ピフーヒヤリトロヒヤリトロ等といい、大胴はドドドドコドン、台拍子はツクツクテンテン等、ほとんどの口伝が擬音のような感じで表わされているのが普通です。しかし中にはちよつとかわつた口伝もあるのです。

それは台拍子の中の「本拍子」という叩き方です。本拍子とは色んな神楽に使われる基本の叩き方なのですが、擬音調で表すと「テンテコテンテコ テンテコンコテン」となります。このまま伝えればそれで良いのですが、もうひとつ別の口伝方法があるので。

それは、「ダイクトシヤカントイツトコドウシン」、あるいは「ダイクトシヤンハイツトコドウシ」の二通りが伝わっています。先輩達に聞いても、「俺は『ダイクトシヤカントイツトコドウシン』と教わった。「いやいや私は『ダイクトシヤカンハイツトコドウシ』と教わった。」とまちまちです。でも漢字に直してみると、「大工と左官は従兄弟同士」となるようにしたいし違いは無いのです。でもこんな所にもこだわるのが口伝なのです。太々神楽の一番先に必ず舞う「奉幣」はこの本拍子が使われますので、もしご覧になる機会がございましたら、口伝を台拍子に合わせて口ずさんでみて下さい。あなたはどっちだと思いませんか？でもほんとに昔は大工さんと左官屋さんは従兄弟だったのでしょうか？



(イラスト 井口三月)

\*1 通り  
舞い方や道すじ

表紙写真

「奉納剣道大会」

桜が咲き誇る春の日差しの中、剣士たちの勇ましい声が山に響き渡ります。毎年四月二十九日に、神社 大鳥居前広場において、中里介山作「大菩薩峠」ゆかりの「奉納剣道大会」が盛大に執り行われています。

未だ曾てあらず、まさに未曾有である雪で迎えた昨春、本年も多少の雪は有るが、無事に春の大祭の日を迎えられそうである。一面の雪の中で、緑を湛えた姿を山肌にもせる神宿る木々。人には耐えがたい風雪の中にも倒れる事は無い。花のように一瞬の華やかさを魅せる事も無く、物言う事も無い。ただ、絶えぬ緑を身にまとい数百年もの間、大地に根を張り力強く生きる。その姿を見て人は何を思うのでしょうか。俳句選者金子先生、東久留米市御嶽神社神山講並木様、上富上総講鈴木様、崇敬者川合様、ピジターセンター片柳様には玉稿をありがとうございます。

平成二十七年 三月 八日発行  
(年一回発行・非売品)  
編集 武蔵御嶽神社  
TEL 〇四三七八 八五〇〇  
FAX 〇四三七八 九七四二  
http://www.musashitakejinja.jp/  
印刷 (株)成和印刷